

「保育実践知」教育プログラム開発に関する研究（2）

—「保育（環境）」における3つの学びの往還と実践的学習の工夫—

A Study on Development of Educational Program about "the Knowing of Child Care Practice" (2)

—the traffic of the three kind of learning and the device of practical learning in "Child care (environment)"—

和田 公子 松本 しのぶ

WADA Kimiko MATSUMOTO Shinobu

本研究では、「保育実践知」教育プログラムの一環として行った、「保育（環境）」の授業における学生の学びについて、〈見る・とりこむ〉、〈行動する・つくりだす〉、〈ふりかえる〉の各学びに即した実践場面を取り上げて分析し、授業の効果と今後の授業のあり方について検討した。その結果、体験学習を取り入れた学びは、幼児教育が環境による教育であることを基本としていることを納得し、領域「環境」のねらい及びその内容を学生が理解するために効果的であることがわかった。また、生活経験の乏しさを補い、興味を持って学習に取り組むことができた。その一方で、3つの学びを展開するためにはさらなる授業内容の工夫が必要であり、また、体験学習を維持するためには大学全体での協力体制が不可欠であることが明らかとなった。

キーワード：保育実践知 保育（環境） 学びの往還

Key Words: Practical Knowledge in child care Child care (environment) traffic of learning

はじめに

奈良佐保短期大学（以下、佐保）では、平成19年度に採択された「文部科学省専門職大学院等教育推進プログラム」において、「幼保統合の『保育実践知』教育プログラム」（平成19年度と20年度の2カ年計画）の取り組みを奈良教育大学と共同で行っている。このプログラムでは、保育の実践の場に参加することや実践に近いものを体験するなかで、〈見る・とりこむ〉、〈行動する・つくりだす〉、〈ふりかえる〉の3つの学びを繰り返して段階的に上昇し、自らの知識と行動を統合する経験を重ねることであり、この理論と実践の往還による学びによって「保育実践知」の形成を図ることを目的としている。

また、佐保では、平成19年度より地域における社会貢献事業として「キャンパス内の自然と設備を活用した地域の子育て事業」にも取り組んでおり、それに伴う環境整備を受けて「自然広場」と農園の活用が試みられている。

幼児教育科では、これらの事業を推進するとともに環境整備した「自然広場」や農園を活用した体験学習を授業に取り入れ、「保育実践知」を育む教育プログラムを開発している。その一環として、1回生前期に開講される演習科目である「保育（環境）」において、①理論や技術を授業で学ぶ（見る・とりこむ）、②実際に保育を体験する（行動する・作りだす）、③学んだ知識や技術、応用学習の成果などを省察する（ふり

かえる)の3つの学びの往還を意図した授業を展開した。

本研究では、「保育実践知」教育プログラムの一環として行った、「保育(環境)」の授業における学生の学びについて、〈見る・とりこむ〉、〈行動する・つくりだす〉、〈ふりかえる〉の各学びに即した実践場面を取り上げて分析し、授業の効果と今後の授業のあり方について検討する。

1. 「保育(環境)」の講義目的と展開

幼稚園教育は、「幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うこと」が基本であると幼稚園教育要領に掲げられている。さらにそこでの領域「環境」や、保育所保育指針の「教育にかかわるねらいや内容」における「環境」では、「周囲の様々な環境に好奇心や探究心を持ってかかわり、それらを生活の中に取り入れていこうとする力を養う」とある¹⁾。さらに高梨は、領域「環境」は、子どもにとって身近な自然や社会の事象に、子ども自身が積極的にかかわり、生活の中に取り入れていこうとする心情や意欲や態度を育てようとするものである、としている²⁾。

しかし、佐保では「保育(環境)」は、1回生前期に開講していることもあり、実際の保育を想像するのが難しく、学生の「環境」についてのイメージの多くはエコロジーや自然などで、幼児の生活の中にある「身近な環境」「身近な事象」に対する具体的なイメージがない。

そこで、〈見る・とりこむ〉では講義や事例解析とともに、学生が体験的な学習を通して、その効果を図ることを目的に実践的な学習を取り入れた。〈行動する・つくりだす〉では、学内を「実践の場」として、自然広場、農園を中心にした施設・環境を幼稚園、保育園に提供し、訪問してもらうことで学生が幼児とかかわる機会を設けた。〈ふりかえる〉では、〈行動する・つくりだす〉のふりかえりとともに〈見る・とりこむ〉での体験的学習についてもふりかえりを行った。図1は、「保育(環境)」の講義において、3つの学びのそれぞれの取り組みを明示し、図示したものである。

以下では、〈見る・とりこむ〉、〈行動する・つくりだす〉、〈ふりかえる〉のそれぞれの学びの授業実践をとりあげ、そこでの学生の行動や意識の変容について述べる。

保育(環境)での学びの往還

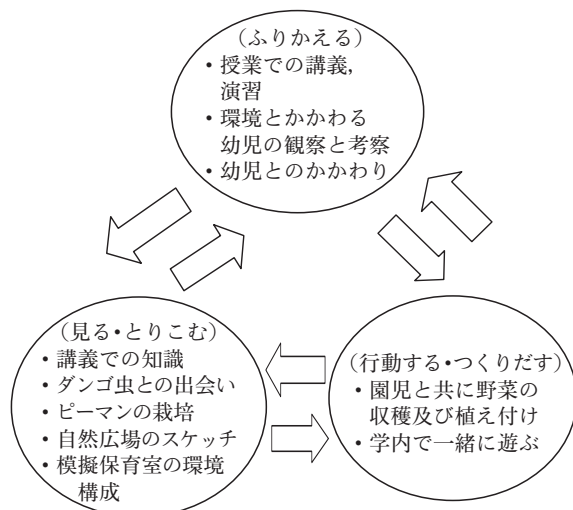


図1 保育(環境)での学びの往還

2. 理論や技術を授業で学ぶ〈見る・取り込む〉

1) 「保育(環境)」で〈見る・とりこむ〉を実践する意図

「保育(環境)」は、保育者としての実践的な知識や技術を習得しなければならない科目である。しかし、1回生前期開講科目ということもあり、保育者として幼児の前に立つ自分自身や、幼児の姿をイメージしながら受講することは簡単なことではない。領域「環境」では、幼児が環境に主体的にかかわり、生活に取り入れていこうとする力を培うことが求められている。このことはとりまなおさず、学生自身が幼児の生活や遊びをイメージしながら、自分の周りの環境に興味・関心を持って主体的にかかわることであり、そこで得た様々な気づきを経験することで、知識・技術を学ぶ道筋を培いたいと学習を進めた。

「保育実践知」として求められる知識や技術は、学生の経験や実態、状況に応じて様々な授業形態を柔軟に取り入れることがより実践的な学びにつながると考えられる。さらに、事例解析や体験をもとにした演習を取り入れた学習を重ね、〈見る・とりこむ〉学びを深めたいと実践した。

２）小さな虫との出会いー「ダンゴ虫」を取り上げてー

子どもは、小さな虫が大好きである。特にダンゴ虫は幼稚園や保育所のどこにでも生息し、入園・進級間もない不安定な時期の子どもたちの興味を引きつけている。しかし、学生にとっては必ずしも親しみの持てる対象ではなく、一部の学生からは「気持ちが悪い」「触れない」などの声が聞かれる。

保育者は子どもたちに、身近な動植物に親しみを持って接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする機会を設けることが求められている³⁾。

保育者を目指す者として、幼稚園教育要領および保育所保育指針の領域「環境」に示されているねらいや内容を十分に理解すると共に、身近な動植物とかかわる子どもと感動を共有し、子どもの興味・関心を喚起させる環境を構成することが必要である。そのためには、身近な動植物の生態や習性について基本的な知識が必要であり、またそれらが子どもの興味・関心を持つ対象としてどのような意味があるのかを把握しておかなければならない。そこでまず、学生が自ら身近な動植物に関心を持ち、さまざまな気付きをしながら、親しみを感じて進んで接する態度や気持ちを持つ機会が必要であると考えた。本講義では、子どもが興味を持ってかわり、引き付けられ、親しみを感じながら接しようとするダンゴ虫との出会いを通じ、〈見る・とりこむ〉の学びとして学生が保育者として必要な知識などを身につける授業を展開した。

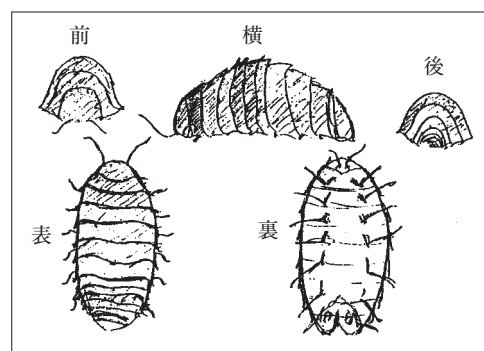
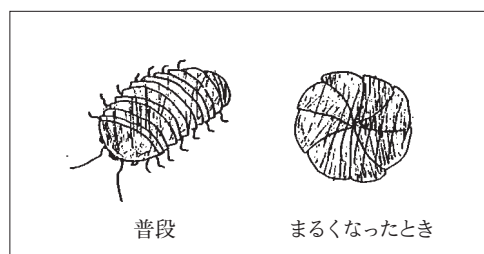
①目的

- ・学内の環境を周知し、いろいろな虫の生息場所を知る
- ・ダンゴ虫の生態・習性を知り、親しみを待つ
- ・子どもが興味・関心を持つ対象として、その意味を探る
- ・「生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする」という意図をもってかわる

②方法

- ・学内でダンゴ虫を見つけ、細かく観察してスケッチする。
- ・スケッチすることで気づいたこと、感じたことなど発表する。

③実践



＜ダンゴ虫のスケッチ画＞

○「気づいたこと」の記述例（複数学生）

- ・足が14本もあって、いっぱいなのに絡まなかった
- ・ダンゴ虫にも目があって、びっくりした
- ・背中すじは、後ろに行くほど間隔が狭い
- ・ダンゴ虫は、思っていた以上に動きが早い
- ・黒い小さなうんちをしたのを見て、感激した
- ・脱皮をしたあとを見て、ダンゴ虫のことで知らないことがたくさんあると思った
- ・丸くなったり、ひっくり返ったり、たくさんの足を必死で動かしたりしているのを見て、可愛くなってきた
- ・おなかに白い点が付いていた。卵かな

④評価

学生の「気づいたこと」から、スケッチをすることを通して、ダンゴ虫の生態に気づき、生命あるものとして親しを感じたことで感覚的な先入観を覆し、知識として生態や習性を理解し〈見る・とりこむ〉学びになった。学習当初は、「気持ちが悪い」と言っていた学生もダンゴ虫をじっくり観察することで、ダンゴ虫のわずかな動きや変化、目を凝らしてようやく見えるような生態などに、「分かった」「始めて知った」と

いう喜びを味わった。授業が進むにしたがって「かわいい」「小さいのに、一生懸命動いている」という声があちこちから聞かれ、その声に触発されたように新しい発見が続いた。実際に触れて見ることで、未体験の好奇心を味わえた。このような学生の心情の変化は、保育者として幼児の実態や興味・関心を理解し、育ちに必要な援助や支援をする動機となり、保育者の資質を高め、保育実践知につながる保育者自身の内面の豊かさを培うものである。

3) とうがらし（ピーマン）の栽培

「保育（環境）」では、自然環境へのかかわりが強調されている。保育現場では飼育・栽培を通して、親しみを持ってかかわったり、いたわったりする経験を意図的に保育の中に取り入れている。さらに、今回の幼稚園教育要領の改訂において、領域「健康」に「先生や友達と食べることを楽しむ」という内容が加わり、「内容の取り扱い」では「食育」が取り上げられ、保育所保育指針の改定においても、第5章「健康及び安全」に「3. 食育の推進」が取り上げられている。幼稚園や保育所において、食育が重視されるようになった³⁾。そのため、「保育（環境）」では、農園での体験をもとに一人一鉢のとうがらし類の栽培を授業の中で進め、栽培経験の少ない学生に体験を通して野菜を育てることで、さまざまな食べ物に興味や関心を持って進んで食べようとする気持ちを育てる食育とのかかわりを学ぶ必要があると考え、取り組んだ。学生が野菜に必要な土づくりから体験し、栽培を通して観察をしたり収穫をしたりして、約3か月を継続的に学習した。

①目的

- ・苗の植え付けから、収穫、食べるまでを体験し、栽培への関心を持つ
- ・土・肥料・水・日当たりなどを考慮して、継続的に世話をすることを学ぶ
- ・成長を見守り、花から結実の過程を知って、収穫の時期を見極め、食べることを通して愛着を感じる
- ・食べるために料理をしたり、家族に提供したりして栽培の喜びを味わう

②方法

- ・農園を監督している教員から、栽培に適した土と肥料の配分を聞き、一人一鉢一苗を育てる
- ・観察日誌をつけ、継続的に栽培をする
- ・収穫の時期には、お互いに声を掛け合い、時期をたがわず収穫し、家庭に持ち帰って食べる

③実践

学生Aの観察日誌から（一部抜粋）

5月13日 植えつけ 《むらさきとうがらし》

観察日時	観 察 し た 様 子
6月10日	つぼみの量がすごい。まだ咲かないのかな
6月13日	とうとう花が咲いた。紫色の小さな花だった
6月26日	背の高さがすごい。葉の量も増えてボリューム満点。収穫の始まり！
6月30日	どんどん実が大きくなってくる。お尻に花のついた子がかawaii
7月3日	大量に収穫！まだまだ小さい実も待機中。葉っぱに張りがあり、夏の日差しにも負けていない
7月17日	今日も収穫。家ではチンジャオロースになるので、味、分らず今夜も我が家の食卓へ
7月22日	この3連休は雨が降らず・・・ほったらかしでごめんなさい。紫の中に緑のとうがらし発見！紫になる力がなくなってきた？
7月29日	昨日から久々の雨が降っている。たっぷり水を吸収してか、株はとても元気が良い。なんと、あきらめかけた実が、またぽつぽつとできていた。花は咲いていなかったのにすごい。もう少し、収穫が期待できそう！

④評価

一人一鉢一苗のとうがらし類の栽培学習は、初めての試みとして一定の成果を得た。学生の「観察日記」から、植え付けから収穫までを経験することで、植物のもつ生命に感動し、栽培をする側の気持ちや世話の仕方、天候などの自然現象の予測の不備などによる育ちの違いなどに一喜一憂しながら、実体験に基づく知識や技術を学んだ様子がわかる。

しかし、授業の合間に世話をしたり観察したりするためには、学生の栽培への取り組みに対する意欲や植物の生命に対する気持ちの維持が大きな課題になった。初夏から夏にかけての野菜の栽培であることで、天候に応じた世話を維持することは困難であった。特に意

欲の乏しい学生に関しては、栽培そのものに興味を示さず、日々の世話をすることさえしなかったものもいる。今回は、学内の教員や職員の助けを得て何とか収穫まで維持することができたが、今後に向けての課題も大きい。

４）子どもが遊ぶ環境として、「自然広場」を検証する

夢の丘キャンパス「自然広場」（以下「自然広場」という）は、奈良市街地を見渡す高台にあり、池を中心に、四季折々の自然の変化を楽しみながら、環境教育の場、専門分野の実践の場、地域との交流の場として整備が進められた。佐保では、「自然広場」を含む学内の様々な施設・設備を地域に開放し、子育て支援に活用するべく取り組みを進めようと準備を進めている。これらの整備・準備を進めながら、近隣の幼稚園・保育所からの訪問を予想して、「自然広場」を子どもが遊ぶ環境として検証することで、環境から刺激を受け、環境に働きかけて必要な経験や知識を身に付ける「環境による保育」の理解を進めたいと授業展開した。

①目的

- ・「自然広場」の中で子どもの活動の展開を予想し、
「周囲の様々な環境を生活に取り入れ

て遊ぶ」とはどのような意味があるのかを考える。

- ・幼児の行動や動線を予想し、安全への配慮について考え、危険個所に対する手立てを考える。
- ・「自然広場」を散策して、実際に昇ったり渡ったりなどして、体験を通して気づけるようにする。

②方法

- ・「自然広場」イラストマップを作成
- ・「自然広場」で展開される遊びを予想する
- ・「自然広場」での安全への配慮と危険個所の予測をする

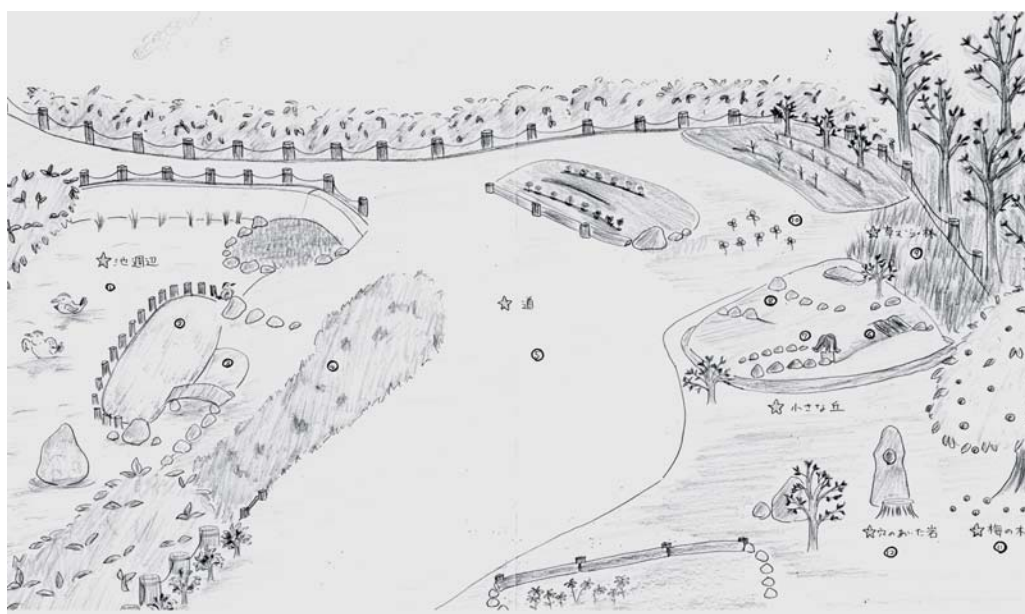
③実践

○学生によるイラストマップ

○検証した「自然広場」の概要

【予想される遊び】（一例）

- ・段ボールを使って、斜面を滑る
- ・池の水辺で生き物の観察をしたり、カモを見たりする
- ・梅や柿の木があって、実をとったり、落ち葉を集めたりする など
- ・ポンプがあって、珍しいので水を流したり、笹舟を浮かべたりする
- ・花や野草を摘んで遊んだり、虫を見つけたりする
- ・勢いがつくと、池に落ちることがあるので注意する
- ・柵を越えると、斜面になっているので危ない(後日、



※ 別紙に、☆印や○印の予想される遊びや安全に配慮することを記述

補修)

- ・丸太橋が小さな山に2本かかっているが、少し高いように思う(後日、補修)
- ・山に石が埋め込んであるが、登って足を滑らせたら危険(後日、撤去)

④評価

「自然広場」は子どもだけではなく、学生の憩いの場所としても整備された。子どもが「自然広場」で遊ぶためには、安全への十分な確認と、子どもがこの環境をどのように遊びに取り入れるのかを予想した配慮が求められる。しかし、子どもの発達や特性を理解して、遊びを予想したり、安全への配慮を考えたりすることは困難であった。今後は、実際に「自然広場」で遊ぶ子どもたちとかわかることで、実際の姿と重ね合わせて予想することなどを行い、実践知を育むことが必要である。なお、この取り組みによって、「自然広場」は、子どもが遊ぶ環境として見直され、必要な補修が施された。

5)「保育(環境)」での〈見る・とりこむ〉を実践して

入学直後に開講する「保育(環境)」では、子どもや身近な自然とかわかる経験の少ない学生に、体験的な学習に重点を置いて知識・技術の学習である〈見る・とりこむ〉場面の学びを実践した。〈見る・とりこむ〉では、知識の獲得や技術の習得が目的であるが、座学の講義では体験の乏しさを補うことは困難であり、学習への意欲も保てないと考え、様々な「実際に触れる」「観察する」「事象にかかわる」学習を取り入れた。保育者の資質として、身近な環境からのメッセージに敏感に気づき、受け止めて保育に取り入れようとする姿勢が求められていることを考えると、体験的な学習であるからこそ、学生自身の感性を揺さぶる動機付けになり、資質向上に有効な学習形態であった。また、〈見る・とりこむ〉場面の学習は、次の〈行動する・つくりだす〉場面の学習を想起させたり、〈行動する・つくりだす〉場面の学習において、〈見る・とりこむ〉場面の学習を確かめたりするなど、2つの学びの往還がさらなる学習効果につながった。しかし、栽培や飼育といった動植物の生命にかかわる体験学習は、制約のある時間、限られた場所に加え、一人の授業担

当者でかわかることの限界も感じた。今後は、学生の主体的な学習姿勢を喚起しつつ、適切な教材の選択が課題となった。

3. 実際に保育を体験する〈行動する・つくりだす〉

1)「保育(環境)」で〈行動する・つくりだす〉を実践する意図

前述の〈見る・とりこむ〉で培った知識や技術を実際に子どもとかわかり、保育実践の一端に参画することで〈行動する・つくりだす〉学びに結び付けたいと考えた。しかし、実際に保育現場に向かうことは、授業内では時間的には困難である。そこで、付属や系列の幼稚園・保育園、近隣の保育施設などに、園外保育に利用してもらって学内で保育実践の一端に参画できる機会を設け、〈見る・とりこむ〉で学んだ知識や技術を確かめたり、検証したり出来るよう実際に子どもとかわかり、保育実践の場に身をおくことで確かにしたり検証したりする、〈行動する・つくりだす〉学びを実践した。

2) 園児と一緒にじゃがいもの収穫とサツマイモ苗植えをする

例年、付属幼稚園および系列保育園は、佐保の農園でサツマイモの収穫を体験している。今年度は農園を整備したこともあり、園児に植え付けから収穫までを体験してもらい、その活動に学生も参加させたいと考えた。そこで、各園に参加を呼びかけた。

附属生駒幼稚園は参加することになったが、地理的に遠く、通園バスを持たない保育園はこれには参加できなかったため、徒歩圏内にある奈良市立A保育園が参加することになった。ただし、日程は両園の希望を優先したため「保育(環境)」の授業時間内に活動を行うことはできなかった。しかし、附属生駒幼稚園の訪問時間については、別の科目の授業担当者の協力により授業時間の調整ができ、多くの学生が参加できるようになった。

当日は、サツマイモの植え付けとともに、すでに農園で収穫の時期を迎えていたジャガイモ堀も一緒に行った。

活動に参加した学生は、A 保育園の活動には1回生で授業の空き時間であった学生6名、附属生駒幼稚園には1回生で他教科の受講生約80名であった。以下は、当日の活動の様子である。

6月4日（水）公立A保育園（４・５歳児 62名参加）

午前9時30分～

付属生駒幼稚園（５歳児 83名参加）

午前10時30分～



サツマイモの苗植え

- ・「サツマイモの苗を土のベッドにそっと寝かせて、土のお蒲団を着せて、とんとんと優しくたたいてね。」と、子どもたちへの説明の仕方と植え付け方を聞く。
- ・子どもたちと一緒に話を聞いて植え付けをサポートする。



ミミズと出会う

- ・ジャガイモ堀をした後、幼児がミミズを見つけ、学生の手に乗せると、ほかの幼児も次々とミミズを学生の手に乗せる。
- ・ジャガイモの種類を聞いて、それぞれに持ち帰る。

3)「自然広場」を中心に、子どもたちとかかわって遊ぶ

「自然広場」のイラストマップを作成して、幼児が「自然広場」で展開するさまざまな遊びを予測したう

えて、安全への配慮などを話し合っ、園児を迎える準備を行った。しかし、実際に園児が来ると、子どもとかかわる機会の少ない学生にとって、どのようにかかわればいいのか分からなくて戸惑ったり、「かわいい」という感情が先立って、適切なかわりができなかったりと課題が明確になった体験であった。したがって「自然広場」を子どもの遊ぶ「環境」として捉えるという視点は、当日の学生にはほとんどなかった。

なお、訪問園は上記の２園に加えて、例年近くの高齢者施設を訪問した後、昼食場所に佐保を利用する奈良市立B保育園も「自然広場」やグラウンドを中心に、遊びを展開した。これらは、学生が幼児とかかわる実体験に加えて、現場の保育者の保育技術や幼児とのかかわりを観察できる貴重な機会となり、〈行動する・つくりだす〉場面ではあるが、同時に〈見る・とりこむ〉学びにもなった。

また、幼稚園や保育所、また設置者の異なる施設が複数で訪問したことは、幼児や保育の実態の違いを学ぶ機会にもなった。



グラウンドでボール遊びをする



自然広場の池周りで遊ぶ

4)「保育（環境）」での〈行動する・つくりだす〉を 実践して

子どもとかかわる経験の少ない学生にとって、子どもが何を楽しみ、誰とどのように遊びを展開するのかを実際に見たりかかわったりできる機会になった。

「見る・とりくむ」で学習したダンゴ虫との出会いやとうがらし類の栽培、「自然広場」の環境マップの作成と検証、および「保育（環境）」での講義は、〈行動する・つくりだす〉の実践において次のような学びがあったことを授業後の学生たちの感想から確認することができた。

- 「幼児の身近な環境を取り込んで遊びに取り入れる」とは、実践の場でどういうことを意味するのか。また、保育者は、環境にかかわって遊ぶ子どもにどのような援助や支援をしているのかを実践の場に実際に身を置いて知ることができた。
- ミミズ、毛虫、カモ、ミズスマシなどの様々な生き物に出会った子どもたちたちの思いがけない言葉や行動に、その興味・関心の深さを垣間見るようになった。
- ジャガイモ堀やサツマイモ植えが目的であったが、それにとどまらず、土や草花、小さな虫などに興味・関心を寄せる子どもたちに、一方的なねらいを押し付けるのではない柔軟な保育実践を見ることができた。
- 保育園、幼稚園という機関の違いに加えて、公立、私立という設置の違いにも触れ、子どもや保育現場の実態を実際に感じるすることができた。

4. 学んだ知識や技術、応用学習の成果などを 省察する〈ふりかえる〉

1)「保育（環境）」で〈ふりかえる〉を実践する意図

子どもは絶えず環境と交渉しつつ、刻々に変化するので、実践における最大の課題は、「一般に」何をすべきかではなくて、具体的な「今、ここで」何を達成することができるのかであり、保育者は日々刻々の判断をする必要に迫られている。保育者に求められる「保育実践知」は、子どもの発達の事実と保育内容、子どもの相互関係を踏まえて、刻々に判断し行動する

力の形成である⁵⁾。本講義では、自分の学びや行動をディスカッションやレポートを通して〈ふりかえり〉を実践し、成果や課題、問題点を明らかにすることで「刻々に判断し行動する力」の形成につなげたいと考えた。

2)「動植物に親しむ」を視点にふりかえる

ダンゴ虫の観察やとうがらし類の栽培を通して、動植物を幼児の興味や関心の対象として十分理解したうえで、学生自身が、それらを生命あるものとしていとおしみ、親しみを感じるすることができた。「子どもって、気持ち悪いって思っていたミミズやダンゴ虫でも、見つけたり触ったりすることをあんなに喜ぶってびっくりしたけど、知ってよかった」という学生の声に代表されるように、講義の中で実感を伴っていなかった虫とのかかわりが、幼児の姿を目の当たりにすることで「動植物に親しむ」ことの実際が見えて、確かな学びになった。

また、訪問した子どもたちの姿から、講義や事例で学んだことが実践現場で展開し、保育者として必要な資質として、保育者自身が動植物に関心を持ち、親しみを感じてかかわることの大切さが理解できた。しかし、生命あるものとかかわることは、生命を慈しみ育てることであることは理解できても、理解したことを判断し継続して、行動につなげることは至難であったことが〈ふりかえり〉をとおして明らかになり、今後の課題となった。

3) 幼児とのかかわりの視点から

幼児とかかわれないことへの戸惑いや不安、学生と幼児のかかわりの仕方へのふりかえり、学生の言葉遣いや行動、態度など、さまざまな視点からふりかえることが求められる。しかし、学生自身のふりかえりについては、「かわいかった」「楽しかった」など、感情的・心情的な感想に終始した。具体的なかかわりを言葉にして話し合っても、それが幼児の特性や発達とどのようにかかわっているのか深く振り返ることは困難であった。「考えすぎじゃないか」「楽しいこと意外に何を振り返ったらいいいのか分からない」など、学生の学びの実態と即していないふりかえりであった。

４）学内を「遊びの環境」として捉える視点から

入学して間もない学内で丸虫を探したり、農園にかかわったり、「自然広場」を検証したりして、学生自身が学内の環境を学びに取り入れる体験を重ねた。領域「環境」では、「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする」とあるように、環境による教育を理解するためにもまず、自分自身のおかれている環境を熟知することが求められる。学内の環境は、自然豊かで種々の植物が茂り、小動物や虫が生息している。この環境を授業に取り入れたことは、学生に幼かった時の自分の記憶や経験呼び起こさせ、そこで味わった好奇心や探究心をもって学内の環境とかかわることができた点でよかったといえる。

５．考察

佐保の現状の教育カリキュラムは、1回生時に複数の専門教科である演習科目を習得することになっている。前述したように、子どもとかかわる経験の少ない学生にとって、子どもの姿をイメージして学ぶことは難しく、授業の組み立てに工夫が欠かせない。

幼児教育は、環境による教育であることを基本としていることとともに、領域「環境」のねらいや内容を理解するためにも、体験学習を取り入れた学びは効果的であった。見る・聞く・触る・味わう・匂うの5感を伴った体験的学習は、生活経験の乏しさを補い、興味を持って取り組む学びになった。

「保育（環境）」での〈見る・とりこむ〉は、1回生前期の科目であることを意識して様々な授業形態で行い一定の成果があった。しかし、このことは、授業時間が予測できずに超過したり、天候に左右されて授業内容を変更したりと、課題を残した。

また〈行動する・つくりだす〉は、地域の保育施設への周知徹底が十分でなかったことと学内の環境整備に時間を要したことで、限られた園の訪問になってしまった。この少ない訪問園の限られた機会と、ゆとりのない授業時間をコーディネートするのは困難であり、有効なシステム作りが必要である。

〈ふりかえる〉については、日々の保育を省察し、課題を見つけ、課題に応じて保育を展開することを求

められる保育職を目指すものにとって欠かせない学びである。高嶋は、保育者は、保育という複雑で不確かな日々の状況の中で、子どもとかかわりを通して、自らの理解の枠組みや援助行為のありようについて省察を重ねながら「反省的实践家」として専門的力量を身につけていくことが必要であると論じている⁶⁾。しかし、「保育（環境）」において、3つの学びの往還のうち、〈見る・とりこむ〉に重点を置くことになり、〈ふりかえる〉については、話し合ったり考えたりすることが十分ではなかった。今後は、実習を経験したり、学内で幼児にかかわる機会を持ったりして、実践的・具体的なふりかえりを行うとともに、学生が自分自身の学びや行動について、保育者の資質として求められている丁寧な「ふりかえり」が行えるよう授業の工夫が課題となる。

以上のことから「保育実践知」教育プログラムに基づく授業の効果と課題としては、以下の3点にまとめられる。

第一に、近年の学生の特徴でもある幼児とかかわる経験や生活体験の乏しさを考えると、座学での学習だけでなく、体験型の授業展開は学生の知識や技術、保育者としての心情面の成長にも効果があることが伺えた。また、実習などの体験がない入学直後において、保育や幼児そのもののイメージさえ乏しい段階では、講義形式の授業よりも実践参加型の授業が学生の学習興味を引き出すこともわかった。

しかし、体験型であるからこそ、授業時間が予測できずに超過したり、また、自然環境を授業に活用する場合は天候に左右されて授業内容の変更を余儀なくされたりもする。必ずしも予定どおりに科目のねらいが達成できるとはいえないため、今後、何らかの工夫が求められる。

第二に、3つの学びの往還を意図した授業展開についても一定の成果があったといえる。まず、科目担当者自身が3つの学びそのものを意識した授業設定をしたことにより、科目そのもののねらいや1回1回の学ばせたい内容についてより明確に学生に伝えることが可能になったことがあげられる。

また、授業の展開においては、〈見る・とりこむ〉、〈行動する・つくりだす〉については、それぞれに学

生が保育者として必要な学びを得ることができた。さらに、この2つの学びについては、その往還が学生の学びから読み取れた。しかし、〈ふりかえる〉に関する往還は今回あまり見られなかった。先述したように〈ふりかえる〉ことそのものが、教員側のねらいほど達成していないためであろう。今後は、3つの学びの往還が学生自身も意識できるような働きかけや教材開発が必要である。さらに、〈見る・とりこむ〉〈行動する・つくりだす〉〈ふりかえる〉をそれぞれ意識した実践場面を提供したが、ひとつの実践場面で複数の学びが展開されることも分かった。特に〈行動する・つくりだす〉の場面設定であっても、〈見る・とりこむ〉の学びを提供することにつながる場面が見られた。

第三に、多くの実践を学生が観察したり、参加したりする機会が増加したことも大きな成果であった。これまでは学外の幼稚園や保育所に訪問する時間などがないため、1回生後期の教育実習まで学生たちは直接幼児とかかわる機会などが乏しかった。しかし、自然広場や農園を活用し、付属園や近隣の保育園などとの連携によって、学内で幼児と保育者の保育活動を目にしたり、参加したりすることで学生たちが早い段階で実際の幼児や保育を体感できたことは、学びとして大きかったといえる。したがって、今後も佐保の学内を幼稚園や保育所の園外活動の場として提供し、学生がそこで学ぶような機会を多く作り出すことが「保育実践知」教育プログラムには不可欠であるといえる。そのため、自然広場や農園をアピールし、より多く協力してもらえる幼稚園や保育所などを獲得していくことが必要である。

しかし、その一方で、幼稚園や保育所の訪問があっても、授業時間と調整できないなど課題も明らかとなった。今後、すべての学生が実践的な体験ができるよう、日時の設定や人員配置などについてより丁寧なコーディネートと学内全体の協力体制が必要であるといえる。

おわりに

本研究では、「保育実践知」を育む教育プログラムの一環として行った「保育（環境）」の授業での取り組みから、実践的な学習および3つの学びの往還を意図した学習についての効果と今後の課題について検討

を行った。

その結果、体験学習を取り入れた学びは、〈見る・とりこむ〉場面の知識や技術の習得に意欲を持って臨み、それを基にした〈行動する・つくりだす〉〈ふりかえる〉場面の学びが具体的であるなど、学習に一定の効果があることが分かった。

また、生活経験や自然体験・遊び体験の乏しさを補い、興味を持って学習に取り組むことができた。その一方で、3つの学びを展開するためには、それぞれの体験学習の意図を明確に伝え、計画的に取り組むなど授業内容の工夫が必要であり、また、体験学習を維持するためには大学全体での協力体制が不可欠であることが明らかとなった。

今回は「保育（環境）」の講義のみをとりあげたが、今後は学科全体でこのような実践を取り入れた講義を増加させ、体験型の学びを繰り返すことで理論と実践を結びつけ、2年間で「保育実践知」を身につけた保育者養成を行っていきたい。

なお、本研究は「平成19年度文部科学省専門職大学院等教育推進プログラム 幼保統合の『保育実践知』教育プログラム」の取り組みをもとに行ったものである。

注・引用文献

- 1) 3) 文部科学省：幼稚園教育要領、第2章ねらい及び内容、第2節各領域に示す事項
3 身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」
厚生労働省：保育所保育指針、第3章保育の内容、（2）教育に関わるねらい及び内容、ウ環境
- 2) 高梨圭子：3 保育の内容・方法がわかる 4 子どものための保育内容とは 幼児教育への招待、森上史朗編 ミネルヴァ書房 100（1998）
- 3) 文部科学省：幼稚園教育要領、第2章ねらい及び内容、第2節各領域に示す事項 3 身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」
厚生労働省：保育所保育指針、第5章健康及び安全、3 食育の推進
- 4) 上野ひろ美：はじめに～保育者養成の新たな段階～、幼保GPセンター編、平成19年度文部科学省専門職大学院等教育推進プログラム幼保統合の『保育実践知』教育プログラム 活動報告書（平成19年度）、

奈良教育大学・奈良佐保短期大学, 1・5 (2008)

5) 高嶋景子：IX保育者の専門性 5 保育者の成長と

省察・研修 よくわかる保育原理

森上史朗・大豆生田啓友編, ミネルヴァ書房 144

(2006)